

第3章 ジョックストラップのユダヤ人から ナタリーのいい人になるまで

—若者が帽子に飾るリボン—

私が十代最後の年にハリウッドに着いたころ、「ロック」、「ロリー」、「トロイ」そして「タブ」という名が、19世紀終わりに、東欧のユダヤ人地区、ユダヤ人虐殺、専制ロシアのコザックテロリスト達から逃れてきたユダヤ人の次世代の息子たちから、若い内気な役者たちにつけられていました。

これらユダヤ難民はニューヨーク、ボストン、ボルティモアに、彼ら民族特有の名前、フライド、メア、ゴールドフィッシュなどの名でやってきました。彼らは、港湾労働者、肉屋、靴の修理屋、廃品回収業者などで生計を立てていました。彼らは自分たちの文化を、パレスチナでユダヤ国家を設立する夢を追求するためにマルクス主義に参加するか、はたまた新しい世界を求めて航海に出るかの決断に迫られた時に、その地に残して来ました。250万人のユダヤ難民がヨーロッパを離れ、そのうち2百万人がアメリカで自由を求めたのです。

彼らが見つけたのは面白みに欠けた自由でした—専制政治はないけれども、東海岸における、アグロサクソン・プロテスタントの階級社会において、彼らがよりよい生活をするチャンスはほとんどなかったのです。そして、もし「映画」という新しい形の芸術が発明されていなかったなら、そこが、反ユダヤ主義から国外へ逃れた人たちの次の世代が、とどまらざるを得ないかもしれない場所でした。

元々、映画技術を開発し名声を得たエジソンは、それを労働者階級の単なる余暇の楽しみと考えていたようです。初期の映画は5セント映画館のような小規模のところで、きれいな商人のユダヤ人とかみそりを振りまわす道化師の黒人を描いていました。最初の大ヒット映画はD. W. グリフィスの「国民の創生」

で、「ク・クラックス・クラン」の人種差別主義の擁護映画でした。文化的な啓蒙や社会的な発展は、ここには提供されていませんでした。

しかし、ほんの少数のユダヤ人セールスマンが、この新しい芸術と商売が入り混じったものが、彼らに大きな評価を残し、新しい故郷で居場所を確保する機会として見てとったのです。WASP s (アングロサクソン系白人新教徒たち) 達が注意を払っていない時に、彼らは名前をメイヤー、フォックス、ゴールドウィンと変え、カルフォルニアへ移るべく西へ向かったのです、そこは一年中日が当たり、また映画技術の特許を誇り、法的にも経済的にも力があつたエジソンの企業の力がなり弱まっていた場所でした。さらに重要なことは、そこにはこれから新しい発見を世に売り出そうとしている人達の熱意をそいでしまうような、社会的な差別も宗教的な偏見もなかったのです。

彼らはそこに自分たちの映画スタジオを立てました、はじめは、地理的には、急速に広がるロサンゼルス東側までと太平洋の西側までの地域に、です。そこはハリウッドとのちに呼ばれることになります。彼らが東海岸の社会で受け入れられなかったのなら、彼ら自身の手で自分たちの社会を作り、アメリカが彼らにとって何を意味するのか、その価値を皆に見せつけようとしたのです。

もちろん、それぞれのスタジオの主にとって、意味する価値は異なりました。MGM のルイス・ビー・メイヤーにとっては映画スタジオのティファニーで(そこで、数十年後若いロバート・ヴォーンという役者が彼のもっとも幸せな5年間を過ごすのですが)、アメリカは、日常の面倒なお金の話や現実社会を超越することのできる神秘的な王国でした。メイヤーの映画では必ず「女王様」がいました—いつも、美しく、スマート、上品に見えて、近寄りがたさのある女優さんたち。ミルラ・ロイ、ジーン・ハーロー、ノーマ・シーラー、そしてあの偉大で知的なスウェーデン人、グレタ・ガルボなどが、もし、ルイス・メイヤーが奥さん以外に持てるとしたら、居てほしいような種類の女性たちでした。ですから、彼は銀と黒の魔法のスクリーンで彼女たちのイメージを、クラーク・ゲーブル、ロバート・テイラー、メルビン・ダグラス、そしてウォルター・ビジョンのような、大きく、ハンサム、情熱的かつ冷静な MGM の男性スターたちとともに高めていたのです。

このメイヤーの魅力的なアメリカという幻想は、彼を受け入れた国のもうひとつの幻想と結びつきました。ノーマン・ロックウェルが描くような中産階級の家庭の道徳観、賢明な父、優しく愛すべき存在の母、生意気だけど気持ちは優しい子どもたち、モクレンの木や白い塀に囲まれた汚れないきれいな家で生活する、ミッキー・ルーニー、ジュディ・ガーランド、が演じるハーディー一家のような家族像です。

もちろん、これが30年代のアメリカが全部そうだったわけではなく、むしろL・Bメイヤーの哲学にそって、そうで合ってほしいというアメリカであったのです。この文化と中産階級の道徳観の入り混じったものこそが、戦前のMGMのテーマとするスタイルだったのです。

この時代、他のハリウッドの偉大なスタジオも、アメリカに対するそれぞれの見解をテーマとするスタイルがありました。ワーナーブラザーズは、冷酷なギャング、グラマーな女性、タフな話しぶりの労働者などが生息する気骨のある、都会的なアメリカを、忘れることの出来ない正確俳優の、エドワード・ロビンソン、ジェームズ・ギャグニー、ハンフリー・ボガード、ジョーン・ブロンデル、バーバラ・スタンウィック、ベティ・デービスらによって描写し、提供しました。

ハリ・コーンのコロンビアは色彩にあふれた、はつらつとした国、風変わりな粗野なヒーローをフランク・カプラ、Howard・ホークスなどの監督による喜劇で描き、ゲーリー・クーパー、ジミー・スチュワート、ジーン・アーサー、そしてリタ・ヘイワースなどのスターが活躍していました。

これらのイメージはMGMによって広められたより上流をきどった空想と同様に幻想的でした。しかし、これらすべてがアメリカが全世界の中で抜きんでて一番の国家になるという時代の自分たち自身のイメージを作り上げるのを手伝ったのです。

それに続く戦争時期には、全てのスタジオが太平洋における日本、ヨーロッパにおけるドイツとの戦いを奨励するような映画を作りました。戦後は新しい話をするランプ……テレビがゆっくりと、しかし、確実に大衆の興味に入り込み、アメリカの想像力をもって代わることとなりました。1950年代のはじめ、私がハリウッドに到着したころは、ほとんどの主要なスターは契約時にテ

レビ出演禁止条項を入れられました。ボブ・ホープとビング・クロスビーだけが、「ライブショー」に限定して出演を許可されていました—パラマウントのバーニー・バラバン社長でさえ会社の重役たちに、「自分たちがテレビに進出するか、さもなくば、映画業界の大半が終わってしまうであろう」と秘かに語っていました。

彼はもちろん、先見の明があったのです。1960年代にはあの天下のMGMでさえ複合企業体と財政面の大物とに傾いて行きました。結果的に、カーク・カーコリアンが小道具や衣装などをオークションに出し、カルバー・シテイの偉大なスタジオを一番高い値段をつけてくれた人に売りました。

しかし、ハリウッドの情勢の変化にも拘わらず、ショービジネスの有名人の現代の時代は光り輝いていました、そして新世代のスターたちが見出しを飾っていました。

ピーター・ローフォードが、米国駐英大使であったルイス・ダグラス氏のお嬢さんと結婚する方法を探っていたイギリスから戻りました。高名な外交官である大使から「私の娘はダメだよ。ケネディ氏と話しなさい。彼のところには適齢期の娘さんがいるから」と断られたと伝えられていました。正に共和党のダグラス氏は後任の大使、正に民主党のジョセフ・ケネディ氏の美しく、機知に富み、知的なパトリア嬢を引き合いに出したのです。

大使閣下は、そう呼ばれるのを好んでいたのですが、「私が私の娘と結婚するのを誰よりも嫌うのは、ハリウッドの俳優である以上に、イギリス人俳優である」と言っていたのです。それにも関わらず、1954年4月、30歳のパトリア・ケネディはピーター・ローフォード夫人となり、大使閣下は明らかに元気ではありましたが。（10年後、パットがピーターとの結婚が破たんした後ですが、彼女には、ほかでもない私とのロマンスが持ち上がることになり—それはまたのちほど）

20世紀フォックスのダリル・ザナックは若いプラチナプロンドの、ジーン・ハーロと比較される—マリリン・モンローと長期契約を結びました。ルシル・ボールとデシ・アルナズはデシル・プロダクションを作り、「ルーシーショー」はテレビで最初のメガヒットになりました。

子役のスター、今や映画の女神のエリザベス・テラーはニッキー・ヒルトン、パリスの大伯父、と離婚しました。（私は1951年の夏に彼女が、私の母の付き添い役だったオードリー・トッターと同じ建物に住んでいた時にちょっとだけ会うことになります）。ハンガリア出身の魅力的な美人のザ・ザ・ガボールはジョージ・サンダースと別れ、リタ・ヘイワースはアリ・カーンを捨てました。ラスベガスではクラーク・ゲーブルがシルビア・アシュレイと別れました。

ハワード・ヒューズは新人のフェイス・ドメルグを公開し、ヘンリー・フォンダ夫人のフランシス、ジェーンのお母さん、が自殺をしました。20世紀の偉大な劇作家の一人である（そして特に私の大好きな）ユージン・オニールも1953年に亡くなりました。

シャーリー・テンプル、1930年代の人気者、が映画界から永遠に引退しました。（彼女は1968年プラハで私の昼食のゲストになります。）コメディアン・のミルトン・パールは前代未聞の35年契約を最低5百万ドルで結びました。（彼の奥さんのルースとはパット・ローフォードを介して60年代に会いました）

さらにその年代にはジュディー・ガーランドがヴィンセント・ミネリと離婚してシドニー・ラフトと結婚式をあげました。（彼女はのちに私のロサンゼルス・シティ・カレッジ時代からの親しい友人であるマーク・ヘロンと結婚します）

そして、最後に、ロナルド・リーガンが未来のファーストレディ、ナンシー・デービスのために、ガールフレンドのルース・ローマンを捨てました。彼らはナンシーが、そのナンシーに私は40年代に会っていたのですが（彼女が私の母とザス・ピッツといっしょに「ラムシャックル・イン」でツアーしていた時）、自分が、本来のブラックリスト対象のもう一人のナンシー・デービスと間違えられて、ブラックリストに載せられたので、そこから外すのを手伝って欲しいと頼みに行ったときに会いました。

これが、私が1952年6月に到着した時に、待ちうけていた騒々しい戦後のハリウッドでした。

私のロサンゼルスへの道のりは災難なしに語れません。私のミネアポリスでの最後の冬の間、私のパッカードは冬の吹雪の中をワイパーなしで運転し、ローマカトリック司祭の車と衝突し修繕不能となりました。その事故により私は大変な借金を抱え込むこととなりました。「物損事故自動車保険」とか言う保険に入っていなければならないことを、知らなかったからです。

懲らしめられましたが引き止められないので、私は西海岸へと出発しました。大学の演劇科の友人ジャック・ロブニーの48年式栗色のビューイックコンバーティブルに乗せてもらいました。コニー・ドリスコルも一緒でした、彼女とは私たち二人がKUOMラジオで仕事をしているときに会い、とても良い友人になりました—ときどきプラトニックではありませんでした。(今の子どもたちは、このような関係を「互いにとって有益な関係の友人」と言うらしいですね) コニーはUCLAでドラマの修士号を取る計画でした。

L. A. に着いて私の最初の使命はまず仕事を探し、あの自動車事故によって負った借金の返済を始めることでした。パティ・ウィーラーは薬におぼれ、もうチェロキーアベニューの母の一室を共有していませんでした。私にはちょっとがっかりするニュースではありましたが、ともかく母の所へ移りました。パティの消息は、悲しいことにその後も分かりませんでした。

母親から長い間離れて暮らした子どもにとって、とても奇妙なことではありますが、19歳から23歳の間、私は母と同じ一室を共有して暮らすことになりました。ほとんどの若者にはこういうのはとても居心地の悪いものであろうと思います。しかし、母のとても開放的な考え方故に、そして同じ役者であるということで、私の人生における目標を完全に理解し、分かち合い、支援してくれたことで、私にとってはとても上手く作用しました。もっと慣習にとらわれたお母さんであれば、恐らく嫌な顔をしたでしょう—遅い帰宅時間、怪しげな仲間、非実用的な仕事の選択、そして演技を仕事とする役者の奇妙な自己陶醉に一しかし、私の母にとってはそれらは全て正常で当然のことと考えられていたのです。

L. A. へ来る前に私がやっていたショービジネス関係の唯一の仕事は、ミネア

ポリスのCBS系ラジオ局 WCCO での仕事でした。ですから、私はすぐにサンセット大通りにあるCBSラジオ局へ、仕事を探しに行きました。そこでは人を雇っていませんでしたが、話を聞いてくれた人が「ヴァインとファウンテンの角にあるCBS-TVへ行って、仕事があるかどうか聞いてみたらどう？」と言ってくれました。

そこでも仕事はなかったのですが、彼らはノース・ヴァイン通り 1313 番地の建物を、独立局のKHJ-TV（チャンネル9）と共有していました。私はその顧客担当に会いに行かされ、ジョージ・ハミルトンと言う男性に会いました。のちに小麦色の肌で有名になる俳優とは別人です。彼は、30代前半で、おしゃれなネクタイと上着に身を包み、ラジオ俳優として恵まれた声の持ち主でした。私たち二人にとって不幸なことに、ラジオ演劇は急速に「音の出るブラウン管」に取って代われ、その場を失いつつありました。そこで、ジョージはショーに必要なスタジオの観衆を集める仕事をしており、私はショービジネス梯子の一番下でもいいから足がかりを探すために彼の助けを必要としていました。

ジョージは私に衣装を沢山もっているかどうかを尋ねました。少々戸惑いながらも「もちろん」と答え、それによって、その場でそく採用されたのだと思います。

私の仕事は局の前での仕事でした。背広を着ていても、またページボーイに変わりはありませんでした。私はジャック・ベイリーの「今日の女王」というショーの観衆を案内し、指示する役割でした、そのショーは、当時のアメリカで一番人気があり、カルフォルニアでのライブで「キネマスコープ」を通して全米に中継されていました。

今日の生番組的なショーの先駆者として、「今日の女王」は落ちぶれた母親たちにお涙ちょうだい話—夫の失業、洪水で家が壊れた、偽膜性喉頭炎の赤ん坊—を競わせ、可哀そうな話に賞品として、新しい家電製品、寝室の家具、などが当たるというものでした。（思い出す人もいるかもしれませんが、ある母親がサークルベッドを欲しいと懇願し、同情したジャック・ベイリーが「それで今その赤ちゃんはどこで寝てるの？」と尋ねると、すかさずその母親は、「新しいテレビが入っていたダンボール箱」と答えたことがありました。彼女はほ

とんど投票を得られませんでした。)そして、私の援助なしで、友人のコーニー・ドリスコルがこの番組に登場し、その日の女王に本当になったことがあります。なんとと言っても、彼女は良い女優でしたからね。

さらに局で仕事をしていた、まだ有名になっていない人達といえば、西部劇スターのコロネル・タイム・マッコイ：ミシガン大学出身の前全米フットボールスターでスポーツキャスターに転身した、トム・ハーモン(今では以前の「最もセクシーな生の男」と言われた俳優の、マーク・ハーモンのお父さんとして有名)：リン・キャストイル-全国放送ラジオのインタビュワーで、彼女を通じて私はマリリン・モンローに会います。(当時「マリリン・モンローの後ろを歩くことは、小さい二人の男の子が毛布の下で枕投げをしているのを見るようなもの」という名言がありました)、さらにジョンと言う名の二人のアナウンサー、コンドンとカールソン：そして最後に、CBSの宣伝マンで、のちにネットワークの番組制作責任者かつCBS社長になった時に、「微笑むコブラ」として知られるであろうジム・オウブレイといった人達でした。

それが50年代のハリウッドの有り様でした。そこで、物事が起きていたのです、そしてそこにしばらく居れば、誰か興味深い人、昔のスターやスター候補から才能はあってもまだ半分有名になるための壁も打ち破ることのできない卵たちに、間違いなく会えたことでしょう。

KHJ-TVのページボーイであることは、スターになることとはかけ離れたことではありました。しかし、私が探していた梯子の一段目ではありました、そして、私は、若さゆえのうぬぼれと熱意で、よりもっと高いところへすぐに登っていくであろうことを確信していました、一方、私は徴兵を避けるために大学生の身分を保つ必要がありました、それではじめての平日の休みに52年の秋の学期から入学するためにUCLAに行きました。

しかし、とても驚いたことに、私がミネソタ大学で得た単位は移すことが出来ないと言われました。更に、私がカルフォルニアの高等教育制度を受けるために必要な科目を、ミネソタの高校時代に履修していないことが分かりました。私がショックから若干立ち直った時、UCLAに入るためには何を取らなければいけないのか、そしてそのためにどこへ行けば良いのかを尋ねました。

「あなたは、代数学、幾何学、生物学、スペイン語Ⅱ、が必要です。」と学

生課で言われました。(私は高校ではスペイン語 I はとっていたのですが、明らかにそれでは南カルフォルニアの一般教養として必要なものを満たしていなかったのです) 「そして、あなたが行くべきところはロサンゼルス市立大学よ。」と言われました。

UCLA はもともとバーモントとサンタモニア大通りにあって、今の LACC のある場所でした。私もし、17.5 単位を LACC の秋学期に平均 C+ 以上で取得すれば 54 年の 1 月には UCLA に入学できるのです。

まあ、これはがっかりした知らせではありましたが、私はそれを大したことのない逆戻りと考えることにしました。そして値段もよかったです: 調査の結果、サンタモニカーバーモントキャンパスでの 1 学期の授業料はたったの 6 ドルだったのです。私の他ににかかる経費は本に 35 ドルくらいで、それには学生ローンを使うことができたのです。ですから私は LACC で手続きをして、また大学生をやり直す準備を始めました。

私は急いでチャンネル 9 へ行き、ジョージ・ハミルトンに私がしなければいけないことを説明しました。彼は「問題ないよ。君を 3 時から 11 時シフトにするよ」と言ってくれました。私はそれで、8 時から 3 時までの昼の時間帯は大学生としての別の生活をする事ができるのです。「それはありがとうございます。」と言い、急いで母の 41 年式黄色のパーカーに乗り、チロキー通りの自宅へ帰りました。

母と私は、私がチャンネル 9 と LACC へ一週間のうち何日かは、バスで行くように、スケジュールを練り直しました。残りの日は母が仕事先のミネアポリスの友人、リアスとフロイド・ランドルが所有するホットドッグスタンドへバスで行って、私がパーカーを使うこととなりました。一週間のうち 6 日間は、朝の 7 時に家をでて真夜中に家に帰りました。(土曜日には授業があり、日曜日を休みにしました。) 私の給料はアパートの家賃月 60 ドルを払うため母と負担しあいました、全ては上手く行きました、ただし、私の残りのもう半分の給与は司祭のキャデラック修繕費として毎月ミネアポリスに送金しなければなりませんでした。

一方、私の友人コニー・ドリスコルは、ハリウッド大通りのアルドコーヒーショップでフルタイムでウエイトレスとして働いていました、UCLA の大学

院に行くため、そしてハリウッドで環境に即して住居を変えて行くためにです。母とコニーと私のくつろぎの土曜の夜は、皆でテレビの前に座って、ポップコーンを食べ、母と私はジンジャービールと混ぜたカムチャッカウォッカ（モスクワミュールして知られているもの）を飲みながら、イギリスの白黒のコメディイヤーを見ることでした。

それ以外には私の社交的な生活は存在していませんでした、おもに私の貧しさが理由です。

母はついにそれに気がつきました。その秋の或とき、何故私が時間を見つけて、どこかへ外出し、社交生活をしようとしなくていいのかを尋ねました。私は正直にあの事故のことを告白しました。母はとても同情的で、そして私を誇りに思ってくれました。そこで、私の生活費の分担分を半分にし、その分を社交生活にあてるように言ってくれました。

それからは、私の一週間での一番の楽しみはハリウッド・ランチマーケットの通りを渡ったバイン通りにあるバー、ジェスタールームへ行くことになりました。土曜の夜、大抵はジョニー・カーソンと一緒に、ジャッキー・グリーンソンをCBSの8時から9時の番組で見て、9時から10時はNBCの「マックスレーマンのユアショウ・オブ・ショウズ」でシド・シーザー、イモジーン・コカ、ホウイー・モリス、カール・レイナーを見ていました。この番組の作家の中には、取り分け、ニール・サイモン、ラリー・ゲルバート、やウッディ・アレンらがいました。

当時私は土曜日の夜はKHJでの仕事がありませんでしたし、仮に休んだとしても誰も気がつかなかったでしょう。大体はビール一・二杯にチーズバーガーを買うくらいのお金を残せるようになりました、ジョニーはそこへビールを飲みながら食事をするのに立ち寄っていたのです。ジョニーがどのように稼いでいるのかは知りませんでしたが、日曜日の午後、30分ライブショウ「カーソンの部屋」— 一人芝居、寸劇、マジックなどで構成— をやる機会をもらっているのは知っていました。そのCBSのショーのためのジョニーへの予算が1つの番組あたり100ドルでした。

ジョニーはハンサムで、若くて愉快な人でしたが、無口で内気なところも少しありました。彼はいつも真面目な顔をしてウィットを言いましたが、他の多

くのコメディアンのように四六時中スイッチをいれた状態にいる気持ちはありませんでした—彼はその場の会話を取ってしまうことはしませんでした。

10年後の1962年、「フー・ドゥユー・トラスト？」というゲーム番組、そこで彼はエド・マクマホンにあったのですが、そのあと、ジョニーは起案者のスティーブ・アレン、そして引退したジャック・パーに続き、「トナイトショー」のホストとなりました。その直後のジョニーと一緒に夜はちょっとした恐ろしい対面もあり、思い出深いものとして残っています。

私はある晩バーバラ・スチュワート、「アンダー・ザ・ヤムヤム・トリー」の舞台で共演した美しい女優さん、とラ・スカラで食事をしました。（ラ・スカラは当時ハリウッドでは人気スポットでした。なぜなら、JFKが1960年の大統領選ビバリーヒルズホテルに滞在したときにそこから出前を頼んだことを誰もが知っていたからです。）ラ・スカラでバーバラと私はジョニー・カーソンとその時の彼のお相手（彼女の名前は忘れました。）にバツリと出くわし、四人で話しこみました。夕食のあと、4人皆でホーン・アベニューのバーバラの家へ軽く寝酒を一杯飲みに向かいました。

私たち4人が彼女の家の玄関への道をフラフラと上がって行きました—バーバラがジョニーの横、私がジョニーのお相手の横—すると、突然黒い姿が植え込みの陰から飛び出してきたのです。彼は笑いながら「スターと寝る女め！」とバーバラに叫んだのです。バーバラは非難しているのが—彼女の婚約者、ディック・ゴウティエ、だとわかると、はじめのショックは困惑と不快感に変わりました。（もしあなたが1960年代のTVシリーズ「それ行けスマート」を見ていたら、ロボットスパイのハイミー役で覚えているでしょう。彼はさらにブロードウェーの「バイバイ・バーディ」最初のコンラッド・バーディーでした。）

それから間もなくして、私はバーバラの親友ルタ・リーの家で彼女の結婚式に出席する喜びを得ました。そのラッキーな花婿はほかでもない私の長年の友人、ディック・ゴウティエでした。

ジョニーはアメリカの夜の人気ショー番組で30年間ホストを務めました、彼のようにウィットに富み、魅力的で、セクシーなスターを他に知りません。彼の早期の友人であったことを誇りに思っています。

1952年の感謝祭までには、私は学生とショービジネス待機組との二重生活にかなり慣れていました。特別な理由もなく自分のこの日常生活を壊したくないという理由だけで、私はUCLAに入るのを53年の秋まで延ばすことにしました。

高校で履修すべきであった全ての科目を終了し、私はLACCの舞台・ラジオコースをとりました、もちろんそれがウエストウッド(UCLA)に移すことが可能であることを確認してでした。その時、予期せぬ幸運が訪れました。

1953年の冬、ジェリー・ブランドとう素晴らしい演劇指導者に率いられたLACC演劇学部が第二次世界大戦中の捕虜収容所についての「第17捕虜収容所」という作品の上演準備に取り掛かかりました。この作品のブロードウェイでの上演は1952年6月に終了し、後に制作された映画では、私の後の友であり、仲間となるウィリアム・ホールデンがJ・J・セフトン役でオスカーを受賞しています。

LACCのその作品で主演を演じたのはトニー・カーボンという役者でした。さあ、ここで、私はマーロン・ブランド、モンゴメリー・クリフト、ポール・ミュニ。リー・j・コップ、レックス・ハリソンなど錚々たる役者さんたちの舞台を見てきた者として、この話をしています。あれから半世紀たった今も、トニー・カーボンの「第17捕虜収容所」での輝かしい演技は、アメリカの舞台演劇史上もっとも素晴らしい演技の一つとして、私の心に永遠に記されています。

私はその作品を何度も見ましたが、トニーは私を落胆させることは一度もありませんでした。そしてさらに、他の若い役者さんたち—皆私と同じ年頃！—もほとんど同じくらい素晴らしかったのです。演出・監督は若いペルシャ人のレイ・アガヤンで、彼もまた細部にこだわったプロでした。(レイは後に、ボブ・マッキイとともにジュディー・ガーランドやキャロル・バーネットのようなスターと仕事をする、テレビ界で抜きんできた衣装デザイナーの一人となりました。)

私は自分自身に尋ねました:この演劇学部がこのような素晴らしい作品を作ることができるなら、UCLAにわざわざ行く必要はあるのだろうか?と。

私はUCLAには行きませんでした、代わりにLACCに残りました、そしてそこ

で、トニー・カーボンに加え、一生の友人となった大学の芸術家たちに出会ったのです。そのうちの一人がジェームズ・コバーン、彼は私と一緒に「荒野の7人」に出演しました。もう一人はトルマン・ヘロン（のちにマーク・ヘロンとして知られる）、私がミネソタから来た時の学部のスターです。彼は私がLACCに来た時に格別に親切にしてくれました。私たちは54年の大学の最優秀俳優賞を二人で受賞することとなりました。さらに私たちはモンテ・ヘルマン、彼はすぐに前衛映画監督として有名になりましたが、監督による「オニールの偉大な神ブラウン」を演じました。

当時トルマンはバイセクシャルだという噂がありました、そして私はその時はぜひぶん熱心だなど思っただけでした、もっとも私はその言葉の意味を「二人の女性を同時に愛する」ことだと間違っただけで解釈していたのです。「彼は相当な男に違いない」と思ったものです。

仕事面でも事がいろいろと上手く動き出しました。53年の春にはチャンネル9で十分先輩になってきたので、自分で時間を決めることができるようになりました。仕事と学校のスケジュールを月曜の夜を休みにして「ルーシーショウ」を見れるようにしたのです。（ハリウッドの若者の自堕落な生活はこんなものです。）

私が「ルーシーショウ」のファンであると言う話が伝わったのでしょう。53年の秋に、ハリウッド大通りとチェロキーのコーナーで小さな新聞スタンドの売り子のアンジェロから、もし「ルーシーショウ」でフレッド・メルツを演じているビル・フロウリー、に会いたかったら、月曜の夕方のある時間に、そのコーナーに居ると良いと、聞かされました。フロウリーは、確かにハリウッド大通りのムツとフランクのグリルに行くのに、フラフラとそこを通るので、ビルはグレープが好きで、ルーシーショウのプロデューサーから、夜にお酒を飲む前に、毎日歩いて少し運動することを勧められていたのです。（そして、それは彼を車の運転からも遠ざけることが出来て、当時の状況においては、とても良い考えでした）

私が時間通りにそこに居ると、確かにフロウリーがその時間にやってきました。アンジェロが私を紹介してくれて、彼は私をムツで軽く飲もうと誘ってくれました。月曜の夕方の儀式、これはその年の残りずっと続きました。

数年後、たまたまビルに出くわしたときに私は彼に丁重に挨拶をして、私たちのムツでの月曜の夜の話を話しました。「君は一体何をいつているのかね？」と怒鳴りました。振り返ってみると、どういうことかわかります—彼が私と会っていたことを覚えていないのは、その時間相当酔っ払っていたからなのです。

そんな昔の 1952 年の夏、ハリウッドの黄金時代の全てのお偉いさんたちはまだ健在でした：MGM の L. B. メイヤー、ワーナーブラザーズのジャック・ワーナー、コロンビアのハリー・コーン、フォックスのダリル・F・ザナック、パラマウントのアドルフ・ズコー。ルー・ワッサーマンがMCA/ユニヴァーサル大国の権力者として力を持つのはもう 2, 3 年少し先でした。

赤のトロリーがハリウッド大通りを走り、ハイランドのコーナー近くにはオールナイトの映画館がありました。そこからちょっと先には、コーヒーのダンやアルドというようないつでも朝食が食べれるところがありました。更にちょっと東には、エジプトシアター、チャイニーズシアターがありました。ハリウッド大通りの反対側のヴァイン通りとのコーナーには有名なブラウン・ダービーレストラン—ダービーハットのように見えなかった—がありました。ヴァイン通りとサンセット大通りの角にはNBCラジオが、そして通りを渡るとワラックミュージックシティー—当時のビックバンドのヒット曲レコード全てが売られていた—がありました。(ビル・ハレイとロックンロールの誕生はそれから 2 年先のことでした) そしてヴァイン通りの 2, 3 丁北にはキャピタルレコードの本部があり、そこで 1960 年代に私はイギリス出身の若者のグループ、ビートルズに会うことになります。

私の家から 2, 3 丁行ったところ、ユッカとウイルコックスの角にもう一人の将来のスターが済んおり、同じくマーフィーベッドの 1 ルームに居ました(そして偶然にも 102 アパートメントでした)。アパートは質素で部屋はロビーに面しており、スターになるのを待っている彼女はお祖母さんと部屋を共有していました。彼女の名前はキャロル・バーネットです。

サンセット大通りを少し西へ行くとグーギーズというオールナイトレストランがあり、そこにロッド・スタイガーやジミー・ディーンが毎晩ハーレーを止めていました。そのグーギーズのすぐ左横にはシュワブドラッグストアがあ

り、(伝説とは逆で)そこでラナ・ターナーは発見されたのではありませんでした、そして、私はそこで、のちのサム・ジアンカーナ(マフィア)の情婦であり、ケネディ大統領の愛人でもあった美しいジュディ・キャベルに会いました。

クレセントハイツとサンセット大通りの向こうには、ガーデンオブアラ、ロバート・ベンチリーとドロシー・パーカーら、アルゴンキンラウンドテーブルメンバーの西海岸の憩いの場所がありました。(注: Algonquin Round Table - ニューヨーク市の著名な作家、批評家、俳優や風刺家たちが昼食を取りながら意見交換の場としてアルゴンキンホテルに定期的に集まった会合から始まっている、1919-1929) そこからさらに2、3分歩くとシャトーマーモントに着き、そこでジョンペルーシが数年後なくなったのですが、サンセットストリップの入り口では、50年代世界的に有名だったサイロやモカンボと言ったナイトクラブがハリウッドのエリート達をもてなしていました。

1952年夏、7月、ロナルド・リーガン、前ワーナーブラザーズの契約俳優であり、米映画俳優組合(SAG)会長であり、自身を「B級映画のエロール・フリン」と称している彼が、SAGを代表してMCA(注1)に映画製作に関わる包括的な権利について手紙を出しました。その後2、3年でMCAはその傘下のレビュープロダクション(注2)を通じて、ハリウッドにおけるテレビジョンの主要な提供者となります。

彼はその時には気づいていなかったのですが、SAG会長として行ったことが、彼を将来の大統領オフィスへと導くことになったのです。1954年にレビュープロダクションのタクト・シュライバーがロニーに新テレビ番組「G, E, 劇場」の仕事に興味ないかと仕事をオファーしました。シュライバーは、あの1952年のSAGの決定がすこしは彼の仕事に恩恵をもたらした思っていたのです。ロニーは8年間の「G. E.」のホスト、そして2年間「ボラックス・デス・」バレー・デイズ」のホストを通して、広報担当としての役割を果たしながら、資本主義を讃え、アメリカの民主社会主義へ傾倒を攻撃するスピーチ力を磨いていたのです。

そうして1964年、バリー・ゴールドウォーターがLAのアンバサダーホテルで行われた資金集めの大会に来れなくなった時、ゴールドウォーターの財

務担当であったヘンリー・サルバトールの友人、ホームズ・タトルからロニーがピンチヒッターを頼まれたのです。リーガンのこのスピーチは全国的な反響を呼びました。1965年の春には、41人の資金力のある経営者たちが「ロナルド・リーガン友の会」を結成、そして翌年、彼はカルフォルニア州知事になったのです。

私についていえば、その年は仕事、学校、仕事、学校、仕事、学校と追われ一スターになることを夢見ながらそして、チャンスがあればいつでもショービジネスの華やかな世界の周りを嗅ぎまわっていました。

私の21歳の誕生日、1953年11月22日、LACCの友人ジミー・コバーンが、ファウンテンアベニューの彼の部屋で、私のためにパーティーを開いてくれました。私が着いた時、外の階段を下りてくるダブルのブラザーに格子のスカートをはいた美しいアイルランドの女性を見ました。彼女はFDR(注4)のような長いシガレットホルダーを得意げに見せていました。彼女の名前はシーラ・アン・ヌーマンでした。

彼女は明るく、暖かく、ウィットがあり、かつ、アイルランド人の強烈な気性の持ち主でした。そして彼女は「ウェル、マイ、ディア」という3語を、絶頂期のメルル・ストリープよりも豊かな様々な感情で表現できる素晴らしい女優でもありました。

シーラはオーバックデパートのバイヤーとして働いていて、私の理解をはるかに超える、一週間に3ケタの給与を稼いでいました。私たちが会うようになってすぐに、彼女は絨毯の商売をやめ、給与よりも柔軟にスケジュールを調整できるウェイトレスの仕事につきました。

そのころ、私は車を持っていなかったのですが、シーラはブルーグレイの1952年式MGTCを持っていました。私たちがサンタモニカ大通りのバーニーズに予算の許す限りのペルノを飲みに行くときには、私が彼女をその日の仕事場所のどこへでも乗せて行き、仕事の終わりに迎えに行くようにしました。(バーニーによればそのペルノはアブサン、媚薬効果があると言われる、が混ざっているとのことでした—私はそれを信じはしましたが、その時点ではシーラも私も薬による後押しは必要ありませんでした。)

シーラと私の初めての喧嘩は私のチェロキーの家の前でした。そしてそれは

忘れようもないものでした。私たちの言葉がエスカレートして行くと、彼女の声はドンドン大きくなり、ジェスチャーも激しくなりました。私は脅し気味に「僕をたたいたら後悔することになるぞ」と言いました。振り返ってみれば、脅しに聞こえたかもしれないのですが、そういう意図は私にはありませんでした。一かりに彼女が最初に私をたたいたとしても、私が彼女をたたくつもりなど毛頭ありませんでした。彼女はこう答えました、「おや、あなたこそ気をつけるのよ。もし私があなたをたたいたなら、あなたが戻ってくることには、あなたのネクタイの幅は流行遅れになってるから」。それは多分本当だったかも知れません。

そして、彼女は付け加えました。「あのね、あなたは今までであったなかで、一番適応力のある気遣いだわ」と、そして私たちの喧嘩は爆笑の嵐となりました。その時が本当に彼女との恋に落ちた時でした。一文字通りではなく、ロマンティックに。振り返ってみると、私たちはアルビーの「バージニアウルフなんて怖くない」のジョージとマーサの前身みたいなものでした。一激しく口げんかをするのが、公衆の面前で愛し合ういささか変わった表現だったのです。

そしてそのころ、私はステージ・ソサエティという、当時ロサンゼルスでもっとも称賛されていた劇団、のオーディションを受けました。その劇団のもとをたどれば、戦後間もなくシュワブズの裏開かれていたアクターズラブで、沢山の伝説的な小劇団を含んでいました。そのラブは女優志望の、そんなに明るいブロードではなかったのですが、当時ノーマ・ジーン・モーテンソンと言う名（のちのマリリン・モンロー）もいました。アクターズラブはアーサー・ケネディグループとなり（ゲーリー・クーパーとパトリシア・ニールー当時のゴシップコラムの格好の題材一らがメンバーにいました）、そして最終的に、50年代前半に、ステージ・ソサエティとなりました。俳優ミカエル・チェーホフ、あのロシアの偉大な劇作家の甥も一時活動的な助言者でした。

私は、ステージ・ソサエティのオーディションのために演ずる場面を選ばなければなりません。50年代中ごろは、ブランドーとディーンの演じ方が手本とされていた時でしたが、私はわざと、全く異なるスタイル、芸術的な血統のものを選びました。私は、モーリス・エバンス、軍人の観客たちの為に行なった2時間版のシェークスピア劇「G・I ハムレット」—またあの劇—で

良く知られている、古典劇の俳優モーリス・エバンスが、ブロードウェイで偉大な優雅さとスタイルで演じた「ダイヤルMをまわせ」から一シーンを選びました。

流行に反する選択をしたにも関わらず、私は役員会に受け入れられました。

ステージ・ソサエティはプロの俳優としての地位を築くためのとても意義のある足がかり

になりました。そこでショーン・オーキャシディの「ガンマンの影」で演じることで、最初の報酬のある役をもらいました。それにより、私は最初の俳優労働組合の会員証を手に入れることができました、小さいながらも人生の節目となる出来事でした。その後、ユージン・オニールの「デザイナー・アンダー・ザ・エルム」の主役のイーベンとして、ヘレン・ウェスコットという若い女優さんと共演しました。彼女は「ガンファイター」（1950）でグレゴリー・ペックの相手役をしていました。その演技は、いくつかの好評価を私にもたらし、ジャック・フィールドという代理人を得ることもできました—もうひとつの節目です。

それとほとんど同じくらい重要なことに、ヘレンが私の新しい相談相手となりました、仕事上でもプライベートでもです。性の冒険家、導き手としての彼女はパティ・ウィーラーの右に出るくらいに非常に近いものがありました—とてもです。ロサンゼルスプレスクラブの裏にあるヴァーモントの彼女の家での、ヘレンと私の初めての夜に、彼女は「この夜のことをあなたは一生忘れないことになるわ」と言いました。ある意味、彼女は正しかったと言えるでしょう。あの日の夜のそれ以外の出来事は全く覚えていませんが、彼女が話をするときの表情は50年たった今も鮮明に私の心に残っています。

1955年の夏の終わりには、私はロサンゼルス・シティ・カレッジで17.5単位を得ていました。その頃私は、第二次世界大戦中にハリウッド娯楽所があった、カヒュンガ大通りにある、レッド・アロー・ボンデド・メーッセンジャー・サービスで仕事をしていました。（私の代理人があまり力を入れていなかったようで、こういう仕事をする時間がたっぷりあったのです。）レッドアローでは、LACCの仲間のゼヴ・バフマンも働いていました。（ジミー・コバーンもレッドアローで働いていましたが、彼はまだ授業があったので、ビ

バリーヒルズ事務所では働けませんでした)。ゼヴは後にブロードウェーでプロデューサー(マラ/セイド)として成功し、エリザベス・テラーのブロードウェー進出作品、「リトルフォックス」と「プライベートライブズ」で相手役とプロデューサーをしました。「プライベートライブズ」の方は彼女の結婚、離婚を繰り返した夫、リチャード・バートンが出演しました。

私たちは見栄えの悪い青のレッドアローの制服とゴワゴワのつばのミリタリーキャップを着せられました。私たちの仕事は、ウィリーズオーバーランドトラックを運転して、映画の台本から入れ歯のセットにいたるまで、いろいろな物を集荷し、配達することでした。クリスマスになると、何ダースものお酒を、事務所やマンションなどにギフトとして配達するのに、渡されました—それら全てが意図されたように行き渡ったとは正直言いがたいのですが。レッドアローに伝わる教えに従って、ゼヴは撮影現場に行くと、トラックの後ろに入り込んでちゃんとした服装に着替えるのです。そうして、防音スタジオの間を歩き回ったり、製作中の作品をチェックしたり、彼の将来のショウビジネスにつながるであろうものならなんでも情報収集をしていました。

ゼヴの撮影現場の非公式のツアーで得たコネは、ついに私のために役にたつことになりました。ある日、仕事中にゼヴから私の目の色をたずねる電話がありました。「茶色だと思うけど」と応えました。

「よし！」とゼヴは言い、「さっさとそこを出て、パラマウントに来いよ、デミルが「十戒」をやるんだ。モーゼ役のヘストンと一緒に黄金の牛のシーンのユダヤ人役を探しているところだよ。君は俳優組合員だから、もし役をもらったら、一日100ドルで5日間稼げるよ！」

私は20分でそこに駆けつけ、すぐにOKをもらいました、ゼヴの援助で、だと思います。私は代理人からパラマウントに連絡するように言われたので、すぐにジャック・フィールドに電話をしました。

ジャックはいつも通りの、自分が大事な態度でした「こんな忙しい時間に電話してきて何の用だい、俺がどれくらい忙しいか分かるかい？何か仕事きたら知らせるよ！」と。

「それが違うんだよ、仕事はもうもらったんだよ」

「何？俺は何て君に言ったっけ？時間が都合悪いって言っただけだから、

どこに仕事あるって？」ジャックはすぐに代理人ムードに変わりました。

「じゃあ交渉したらすぐに知らせるから」と約束しました。

もちろん、交渉することなんて無いだろうと私は思っていました—エキストラは所詮エキストラだと。しかし、私は間違っていました。ジャックはその日の夕方に電話してきました。「あれから、ズーとパラマウントと戦ってたんだよ。君の二週間目の仕事も勝ち取ったからね。ユル布林ナーのすぐ後ろの二輪厘馬車のアラブ人の役さ」

「それはすごい！」と私は答えました。

「これが君のために俺のできることだよ」「でも馬車に乗ってるときは目が隠れるくらいにヘルメットをかぶるのを忘れるなよ」

「なんで？」私は戸惑いました。

「何でって聞くか、黄金の牛のシーンのユダヤ人が、ユル布林ナーの後ろの馬車で何してんだって、観客が思わないためにだよ」

私はこの10日間の仕事で1000ドルの収入を得ました。これに比べて、私のレッドアローでの一週間の手取りは平均35ドルです。簡単な算数が、私に私は役者であって、トラックの運転手ではないことを教えてくれました。(もちろん、母が私が4才のときに言った、「さああなたはこれで役者よ」という言葉は忘れたことはありませんが)

私のユダヤ人としての1週目についてちょっと触れておきます。

チコ・デイという人がデミル監督(C. B. と親しい人は呼んでいました)の第一助手でした。私がセットで初日に会った時、チコはこう言いました「あの監督は「本当の役者をエキストラの中に入れて、エキストラたちが凄く良くなる、という理論をもっているんだよ」と。「そして、それが君の責任だ、このエキストラ達がより良い演技をするようにね」

エキストラの全てが私より2倍ほど年上で、観衆として座っている以上に映画での経験があるという事実にも関わらず、です。しかし私はチコの主張をとってもまともに受け止め、すぐに嵐のように演技に取り掛かりました。

私の熱意ある演技は明らかにジョン・デレック、その映画の中のスターの一人、50年代の映画のもっともハンサムな若手俳優の一人、の注意をひいたらしく、彼がチコを横に連れて行き、私の方を指しながら、「あいつを私から

離せ、そうじゃないと観客が混乱するだろう」と言ったのです。彼が意味していたのは多分そのシーンで誰がスターかが分からなくなるかもしれない、ということだったのでしょ。そのことを気に留めながらも、私はその日の朝6時に、ジョックストラップだけをつけた状態で、前身に黄褐色のスプレーをかけられました。(これが私をユダヤ人らしく見せるための制作側のアイディアだったのです)。そしてそれから、そのジョックストラップをかるうじて覆う程度の腰巻をつけさせられました。それとは対照的に、ジョンは彼が素晴らしく見えるように色彩豊かな衣装に包まれていました。それでも、ジョンはまだ私が彼を食ってしまうのではないかと心配そうでした。

それが私のスターのエゴのはかなさとの初めての遭遇でした。そしてそれは私にとって最後の経験ではありませんでした。

撮影1週目の最後の日、午後1時ごろ、C. B. は高いクレーンの上に居ました。そこにはカメラを操作する人と、デミルがキャストに話をしたいタイミングを予測するだけの役割の人も一緒にのっていました。そしてその時に、金色のマイクを舞台中に響き渡るくらい大声の持ち主の偉大な監督の前に差し出すのです。

その時、デミルは本当は黙っていなければならないときに、おしゃべりをしている若い女の子のエキストラを発見しました。巨大なステージの上から彼はチョコにその女の子のところへ行くように指示をしました。そして言ったのです。「さあ、お嬢さん、これから撮影しようと言う時にそんなに話さなければならぬ大事なことってなんだい？」

おののいて、彼女は答えることができませんでした。C, B. は同じ質問を繰り返しました。まだ反応がありません。3回目に尋ねた時にやっと応えたのです、ほとんど囁くよりも小さな声で、「私はいつあのはげ頭の監督が、お昼にしようと言ってくれんだろうと話をしていただけです」。

長く息苦しい沈黙があつて、そのシーンにいた数百人のエキストラの人たち、私を含めて、ですが、可哀そうな女の子の事を、考えて皆、下を向いていました。

デミルはゆっくりとその金色のマイクを口にあて、長い間黙り、そして沈黙を破って、大きな声で一言ったのです。「お昼！1時間！」

祝福と大歓声が上がり、私達は皆昼食に立ち去りました。

私の腰巻姿のユダヤ人としての映画出演だけが、私が積み始めていた演劇経験ではありませんでした。前にも述べたように、私はステージ・ソサエティのオニールの「デザイナー・アンダー ザ・エルム」に出演していました。その第2回目(そして最後)の公演の後に、美しい白髪紳士が楽屋にやってきて、私に自己紹介をしました。彼の名前はダッドリイ・ニコルス。後で彼がオスカーを断った初めての脚本家であることを知りました、1935年の「インフォーマー」(主演:ビクター・マクラグレン)のオスカー脚本賞をです。(当時、脚本家組合はストライキをしていて、ニコルスの行動は映画会社による脚本家酷使に対する抗議だったのです)

彼はステージ・ソサエティやLACCでずっと私を見てきたと言いました、LACCのローラの「ベル、本、ろうそく」:モリエールの「タルチュフ」:そして主役をした「ミスターロバーツ」をです。彼は「君の身体能力と演劇的な輝き、そしてそのチェロのように響く声を持ってして、もし君が舞台上で活躍を続ければ、いつかアメリカのオリビエになれることだろう」と言ってくれました。

私はあまりのほめ言葉に、卒倒しそうになり、ひたすらお礼をいうのがやっとでした。ニコルス氏は「次にまた君が地元の舞台に立つときは知らせて下さいよ」と言いました。彼は、帰ろうとしたときに私を振り返り、こうも言ったのです、「だけど、君は容姿の良い若者だからねえ—多分映画に呼ばれる日がすぐに来るだろうねえ」

2, 3日後、オニールの劇のために伸ばした髭に覆われた顔のまま、1955年ハリウッドボウルから広がる巨大な屋外劇場で行われた夏の作品「巡礼劇」の裏切り者のジュダの役の本読みテストを受け、役をもらいました。(思い出してみると、一週間で500ドルというかなりの給与をもらいました、キリストを演じた俳優にくらべるとそれほどでもありませんが、聖書にあるような30個の銀よりかなりましでした)。約束した言葉通り、ニコルス氏はまた私を

見に来てくれて、再び凄くほめてくれました。

ハリウッドの古い言い伝えがあります:もしその映画のシーンをどうしたら良いのか迷ったときは、犬、子供、あるいはリンカーンに切り替えろ。この考えがどこから来たのか、そして映画製作の法則にどんな効果があるのか良くわかりませんが、私のテレビでの役は1955年秋のリンカーンを相手に演じるものでした。私の代理人のジャック・フィールドがNBCのヒット番組、リチャード・ブーンがホストの「メディック」の本読みテストを準備してくれたのです。その役はチャールズ・リールと言い、リンカーンが撃たれた夜にフォード劇場にいて、翌日無くなるまで手当てをしていた22歳の軍医でした。(以前にも書きましたが、「メディック」はこのような歴史に基づいたドラマをやっていたのです。) 実際のところ、この街の若い役者誰もがその役を望み、私が勝ち得ました—私がその後のキャリアの中で役のためにした最初で最後の本読みテストでした。(その後まもなく依頼された、わたしの飛躍のきっかけとなった映画「都会のジャングル」のスクリーンテストは含んでいません)

そのエピソードには子供も犬もいませんでした、ただオースティン・グリーンというNBCの天気予報係りが昏睡状態のリンカーン役でした。私は男性に口移しの人工呼吸を行い、それで互いにのりにつけた口髭がくっついてはがれてしまいました。コッカスパニエルにシーンを移されるよりましだったかもしれませんが(結局そのシーンは使われませんでした)

1956年1月、私はロサンゼルス州立大学から文学士号を得て卒業しました。私は引き続きUCLAで修士号のために勉強を続けるつもりでした、そうすることで、徴兵猶予を維持するつもりでした。

母はそのころウィルシャー大通りのオーバックデパートの衣装・宝石部門で働いていました。その仕事は当時私の大好きな女友達のシーラ・アン・ヌーマンのお陰で得たものでした。

ある土曜の夜、いつものようにモスクワミュールを飲みながら、私は母にロサンゼルスにあるプロの劇団の本読みテストを受けてみてはどうかと尋ねました。彼女は丁重に断りましたが、本当のところは、私が思うには、それまでにあまりにも断られ続けて、精神的に打撃を受け、もうやってみることに疲れ果てていたのだと思います。ですから私が、「じゃあ、僕が探してみるよ、も

し、何かお母さんに合うような役を探すことが出てきたら、シーラの前で約束してくれる、その役のために挑戦してみるって？」と言ったのです。

「そうね。私はもうとても神経質になっているのよ。でもそうなったらやってみるわ」

私は母のプロの女優としての四半世紀の履歴を作り、「大人の」女性の役はないかと探しはじめました。(母はこの時点ではタルーラ・バンクヘッドー感情表現豊かな貴婦人がぴったりだが、いざというときにはコメディーもできる一ようなタイプでした。 やがて、ステージソサエティの2年間でできたいろいろなところとのつながりから、サンタモニカ大通とクレセントハイツのところにプレーヤーズ・リング・ギャラリーという新しい劇場が開設されることを知りました—新しい劇場、つまり新しい舞台製作、そして多分いろんな役が求められることを意味していました。

その次の月曜日、私は41年式黄色のパッカードを運転し、その劇場へ行きました、そこでまたもや私の人生を劇的に変えるであろうもうひとつの予期せぬ瞬間に遭遇するのです。

私は劇場の切符売りの女性のところへ行きました。 こけら落としにどんなショーを計画しているのか、母の略歴を渡しながら、東部の劇場経験豊富な40歳代の女優に役はないかと尋ねました。

彼女は即座に「いいえ、最初のショーは全て男性キャストで行われる予定です。南部の陸軍士官学校が舞台です。」と応えました。そして「あなたは役者さん？」と尋ねました。そうだと応えると、「それなら、台本を読んで、あなたに合いそうな役がないかどうか見てみたら？」と言ってくれました。

その劇はカーダー・ウィリンハムスの「エンド・アズ・ア・マン」で、後にわかったことですが、アクターズスタジオで練習ように使われたのが始めて、後に友人となるベン・ギャザラのキャリアをスタートさせたものでした。(彼はこの映画版「ザ・ストレンジ・ワン」でも主役を演じました。) 私はその台本を読み始めて2、3分で、大きな声で叫びました、「これは今まで出会った中で自分に最も適した役でだ。この役をもらわないと！」

そして勝ち取りました。

その舞台は1956年3月27日火曜日に幕を開けました。私はジャッキー・

デ・パリ、肉体的にも精神的にも触れるもの全てに、神への崇敬を抱く、精神障害かつ人格障害のある陸軍士官学校（ウィリンハムの自身のシタデル士官学校での経験に基づいた）の上級生の役を演じました。ロサンゼルスタイムスは私の演技を「光り輝く悪魔」だったと評しました。数ある率直な素晴らしい講評のひとつでした。私の後の演技努力はより多くの人に観賞してもらえ、さらにもっともっと有名になりましたが、私の演劇人生において、私がこの”エンド・アズ・ア・マン」で得た反応ほど私を満足させてくれた経験はありませんでした。

振り返ってみれば、「エンド・アズ・ア・マン」における私の演技ほど、精神的にも感情的にも、ほとんど努力をする必要がなかったものはないと言えます。多分、人間の姿をした悪魔の役を演じることが、自分にとって、とても自然であったということを不安に思うべきであったのかもしれませんが、しかし、その時は、私は批評家や観客の反応に純粋に興奮しました。（実際のところ観客の一部はカーテンコールの間私に対して脅すようなジェスチャーをしました。まるで私の演じた悪魔が彼らの心に完全に入り込みそれが私自身であるかのように）　そういう電流が劇場を満たしたとき、そして、自分がその一部であったとき、それは、とてもワクワクするものです。

かつての目立ちたがり屋はやっぱりいつも、目立ちたがり屋なのです。

ダッドリー・ニコルズ—私の最初のファン—はプロデューサーに素敵な手紙を送りました、それを私は今でも大切に保管しています。　彼はその手紙をつぎのようなコメントで締めくくっています。「ハムレットを演じているのを見たいと思うアメリカで唯一の若手俳優である。彼はその才能がある。」と。

マックス・アーナウ、私の後のGACの代理人—ロナルド・リーガン—を30年代にハリウッドに連れてきたのと同じ人ですが—その舞台公演の最初の週の金曜日に私を見ました。マックスはその週末にヘッチト・ランカスター（当時のハリウッドで最も熱い独立プロ）に移るため、コロンビア映画を去ることを計画していました。ビジネスマンとのパートナーシップ、代理人出身のハッチト、そして自信たっぷりの主役を演じるバートランカスターによって作られたその組織は、1955年のオスカー作品賞を「マーティ」で受賞したばかりでした。その作品でアーネスト・ボーグナインも主演男優賞を受賞しました。

マックスは自分で見たものを気に入りました。実際のところ、あまりにも気に入ったので、その時雇われていたところを、将来関わるためのために裏切ったのです。彼はコロンビアに報告書を書きました。「ロバート・ヴォーンは契約するに値せず」そして一方で、2週目の公演を見るようにとマックスに急かされて、バートとハロルドが私を見にやってきました。翌週、私は彼らのプロダクションと1年間に2本の映画、一本15000ドル、の非専属契約しました。つまりその契約は彼らの映画に出ていない時には、テレビでも映画でも舞台でもなんでもできるものだったのです。

私の第一回映画出演作は、ゴシップコラムニストとがけっぶちの広告代理人を描いた、ショウビジネスの裏舞台の汚さをあからさまに表現する作品でした。最終的に「成功の甘き香り」というタイトルとなりました。しかし、私の名前、ロバート・ヴォーンをクレジットにさがさないでください。マーティー・ミルナー（後のルート66のスター）が、私のやるべきはずの役をやりまし、わたしが米軍で母国に仕えている間にです。私はその役を演ずることはできませんでしたが、ハッチト・ランカスターとの契約は最終的には私の映画の世界、やがてはスターダムへの、強力な入口であったことを証明することとなりました。

そうして、「エンド・アズ・ア・マン」の開幕の夜は私のプロとしての人生の本当の転機となりました。そしてそれはもう一つの理由でさらに特別なものとなりました。その夜、私は街で最も人気のある若手女優—ナタリー・ウッドという名のとてもかわいい17歳—に紹介されたのです。

「ナタリア」、と私は良く呼んでいました、はニコラス・レイの「理由なき反抗」にジェームズ・ディーンと共演したばかりでした。ディーンはその前年の9月30日にパシフィック・コースト・ハイウェイの自動車事故で亡くなっていました。しかし、ナタリーの星は輝き続けていました。彼女はすでに、全てのファン雑誌—今の“ピープルトゥデイ”に匹敵するような役割を1950年代に果たしていた—の表紙から徐々にエリザベス・テイラーを押し出して

いたのです。そのファン雑誌は今のようなゴシップを吹聴するようなテレビのエンターテイメント番組がなかったので、当時は有名人の世界ではとても重要な役割を果たしていました。

開幕公演が終わった後の夜、出演者のパーティがありました。そこで、私の友人の俳優ベン・クーパーが、私をナタリーに紹介してくれたのです。もし、あなたがナタリーを映画で見たことがあるなら、彼女がどれだけ、忘れられないくらい美しかったかわかるでしょう。その純真さと情熱の混在する、燃え上がるような大きな茶色の瞳、か弱く、つつましやかな雰囲気。 そのか弱さはナタリーが撮影をしていないときの方がより強く感じられ、メイクをしていないときの彼女は18歳というよりも12歳の少女のように純真に見えたのです。

あのときから半世紀以上たっても、その記憶は鮮明に残っています。私たちの手が触れ合ったとき（握手ではありません）、またお互いに会うだろうと思えた瞬間がありました。そしてそれは数分後に、彼女が私の母に「息子さんは今、誰かとお付き合いしていますか？」と尋ねたことで確かなものとなりました。母がなんと応えたのかはわかりません：母は映画スターを目の前にすると上がってしまうのです。しかし、パーティが終わる前に、私は彼女の電話番号を手にしていました。

私たちはさよならを言い、ナタリーはこう言いました、「もし私があなたに電話をしなくてもがっかりしないでね、私は多分テレビのライブショウをデニス・ホッパーとするのに、ニューヨークに行くことになると思うの。」 私は彼女がしばらくいなくなることを聞き、実際のところとても安堵しました。私はお金もなく、小さな部屋と小さな車を母と共有している状態だったからです。（私の質素な状況は他の女性とデートするには十分でした—しかし、ナタリーはスターでした）

そしてそのとき、全てが変わったのです。ナタリーが出かけて、戻ってくるまでの間に、私はバート・ランカスタープロダクションと契約をしました。そして、私は、次々とたくさんの有名なテレビ番組にゲスト出演をしていました。そして6月までには、人気の若手俳優とし

て突然に得だした収入で、私と母はハリウッドの灯りを見渡せるオーキッドアベニューにある3階建てのペントハウスに引っ越していたのです。

そうしてナタリーがハリウッドに戻ってきたときには、約束どおり私を探し出し、彼女のサンダーバードですぐに私のところへやって来ました。私の夢のスターダムへの第一段階は実質的に完了しました。もし、私にとって物事がもっと良くなる可能性があったとしても、これ以上のことはあるとは思えませんでした。影しか存在していなかったところに、突然に光が照らし出し、神秘でしかなかった未知の世界が目の前に開きだしたのです、そしてその未知の世界への優しい案内人がナタリー・ウッドだったのです。

私はナタリーのお母さん、マリアに会いました、ニックネームはマッドでナタリーのことをナターシャと呼んでいました。奇妙なことですが、振り返ってみたとき、私はマッドのことを、ナタリーがロザリンド・ラッセルと共演した、1962年の映画「ジプシー」のローズのようなロシア人の生まれ変わりのような印象で覚えています。しかし、マッドはロザリンド・ラッセルではありません。ナタリーの美貌は全部ハンサムなお父さんニックから受け継いだものです。私はお父さんとは良く知り合うことはできませんでした、彼はいつも笑っているだけでした。後でわかったことですが、これはお酒のせいで、彼の場合はウォッカのせいでした。そして、彼は英語が全く話せず、母国語のロシア語を話すのみだったのです。

映画スタジオのドアが開かれました。私たちは数々の新作映画の礼装試写会へ出かけました。（私が覚えているのは、エリア・カザンの「ベイードール」キャロル・ベーカーが主役でした）。これらの行事は、私にとって以前は、ハリウッド大通の映画館で白黒フィルムで見ただけのことでした。今、私はロック、ローリー、タブやトロイといった名前の人たちが集うパーティーの若手のAリストの仲間入りをし、そして突然私の写真が彼らと一緒に取られるようになったのです。

ファン雑誌は私にインタビューをしたがりました。「ナタリーは普段どんな感じですか？何を食べますか？どんな本を読みますか？いつもお化粧品をしているのですか？彼女はどんなところへ行きたがりますか？お酒は飲みますか？飲むとすれば何を飲みますか？ダイキリやブランディアレキサnderの

ような学生たちが卒業パーティで飲むようなものを飲みますか？ 彼女が他の人とデートしたら気にしますか？」有名人としての輝きはほとんどナタリーに関するものでした、が、私はそれでもなおその恩恵に恵まれていたのです。

ナタリーはテスピス（悲劇の創始者と言われる詩人紀元前6世紀）の真の信奉者でした。演劇の芸術性を深い関心を持ち、優秀な役者を心から讃え、偉大な監督たち（カザンのような）を実質的に神々のように尊敬していました。そして、彼女はとても心の広い優しい人でした。私にとって幸運なことに、彼女は私の才能を信じてくれていて、彼女の特権を有効活用してくれたのです——一人の若い俳優からもう一人の若い役者への驚くほど寛大な贈り物です。

ナタリーは私をワーナーブラザーズへ連れて行き、スタジオ責任者のジャック・ワーナー、に紹介しました。彼女はコロンビアスタジオで行われた「ノータイトム・トゥービー・ヤング」の私の衣装テストにも一緒に来てくれました。この映画はヘッチト・ランカスタープロからコロンビアに私を貸し出す形でスクリーンのクレジットには、心地よく、「ロバート・ヴォーンを紹介」と書かれていました。

コロンビアでは悪評高い、恐怖のスタジオ責任者で、タフガイのハリー・コーンに出くわしました。ナタリーは、私を彼に将来のスターと言って紹介してくれました。ハリーは私を上から下まで眺めて、吐き捨てるように「大きさは？」と言いました。（ハリーは小さいほうでした）私は「身長がどのくらいか聞いておられるのなら、マーロン・ブランドやローレンス・オリビエと同じくらいです。十分な大きさですか？」と答えました。ナタリーはこれに青ざめましたが、ハリーは笑うことなく、「なら大丈夫だ」と言って去って行きました。

ハムレットとオフエリア—またあの劇—の衣装を着て、芸術家とモデルの舞踏会—ミッキー・ハギティ（マリスカのお父さん）が奥さんのジェーン・マンズフィールド（豹がらのビキニを来た）を頭の上に抱えて運んでいました—に出席すると、また次の日新聞に掲ったその写真が世界中に回りました。

私たちはピンクのコンバーティブルを、その後すぐに悪名高くなるサン・フェルナンドバレーにあるヴェンチュラ大通りのカサ・デ・キャデラックで、路上テストをしたり、コンクリートのスターの手形（と他の物）が歩道を飾っているグローマンズチャイニーズシアターのとなりの、ハリウッド大通りにある

CC ブラウンで、ホットファッジサンデーを食べ、シャーマンオークのバロンでチアンテイを飲みピザを食べたりしました。

私たちは二人ともまだ親と一緒に住んでいたの(ナタリーはマッドとシャーマンオークのバレービスタにある家にいました)、私たちのロマンティックな幕間は、パシフィックハイウェイ沿いにある、ポイント、トランカズレストラン、そしてシーライオンなどでワインを飲み、食事をした後、ほとんどマリブで過ごしました。私たちにとって幸いなことに、ローカルのホテル経営者たちは「ショートステイ」のお客さんを歓迎し、面倒な質問はなにもしませんでした。

幾晩かはハリウッドのユッカにあるヴィラ・カプリで食事をしたこともあります。そこは以前私が住んでいたチェロキー通りから1ブロック半はなれたところでした。私たちはフランク・シナトラに会い、ナタリーが私の才能を沢山ほめて彼に紹介してくれました。私は以前に彼をヴィラ・カプリで見ることがありました、ビールとジャックダニエルでご機嫌のときにちょっと音のずれたピアノに合わせてあの壮大な声で何曲か歌うのを聞くことができたのです。

奇妙なことに、エルビス・プレスリー—ナタリーの友人で、有名人としては、当時ナタリーに匹敵するくらい人気のある男性—が私たちが付き合っているときにいつも居るような感じでした。(1956年の秋には、ナタリーへのファンレターは世界で一番になったと、ワーナーブラザーズの広報から言われました)。

ナタリーがエルビスとメンフィスを訪れて帰って来た時—スタジオの広報がファン雑誌や劇場のニュース映画用にアレンジしたような旅—私は、ロサンゼルス空港に、彼女の寝室用に用意した沢山のぬいぐるみを抱えて、迎えに行きました。私たちはサンタバーバラのサンタネッツインで待ち合わせをし、アカプルコのヒルトンホテルオープンの際に一緒にいるのを見られました。

ナタリーと私は、プレスリーの最初の映画「ラブミーテンダー」—一緒に見ました。私は、彼が俳優としてどんなに素晴らしいかをほめたのを覚えています。「もし、あの大佐“エルビスのマネージャー、トム・パーカーのこと”がエルビスを映画に向かせたら映画俳優、役者として多分大成功すると思うけど。ただどきっと彼は、歌が要求される役しかさせないだろうね。」と言いま

た。そして、全くそのようになったのです。

別の時にはサンタモニカのパシフィックオーシャンパークで、エルビスのゲストとして夜を過ごしたことがあります。エルビスは、彼の新しい友人たちのためにパーティーを開くのに、遊園地を購入していました。そこで、ナタリーと私は静かな時を、暗く押し寄せる波を見つめながら、紙コップでワインをすすり、溺れることに対するお互いの恐怖について語って過ごしたのです。後に起こったことは背筋の凍るような恐ろしい記憶です。

(そして、私はその後も奇妙なことに、エルビスとは縁があるのです、ハリウッドではそういう予期せぬ偶然はあることなのですが。10年後、私のMG Mの4部屋からなる控室はちょうどエルビスのウエストコースト音楽会社事務所の真上にあつたのです。廊下や外の通路で出会ったとき、結構あつたのですが、は、いつでも私にたいしてはとても礼儀正しく、やさしく接してくれ、私を彼のメンフィスの高校の友人たちに紹介し、そして常に“ミスターヴォーン”と敬意を表してくれました。)

デートは更に続き：ウォルター・ウィンチェルのカクテルパーティー、映画「ラストラダ」を見たり、ビバリーヒルズルアウレストランで、ネービーグログを飲んだりしました。そのレストランのオーナーはスティーブ・クレインで、ラナ・ターナーの夫で、ギャングのジョンロッセリ（JFKを、ディーリー・プラザの下水道から、ライフルで暗殺したと主張した人物）の友人でした。

もうお分かりいただいたように、ナタリーとの友情は私の青春時代の最も重要なものの一つです。私はしばしば、彼女のことを思います。

もちろん、私たちは別々の人生の道を選びました。翌年、ナタリーはロバート・ワグナー（RJと友人たちは呼びます）と一度目の結婚をし、奥さんとなりました。

2006年、RJは、私のやっているBBCの「HUSTLE」の4シーズン目に、ゲスト出演しました。ロンドンベースのものですが、ロサンゼルスとラスベガスで、その年の12月に撮影をしたのです。皮肉なことに、そのシーンはマリナ・デル・レイ、ナタリーが溺れたところからそんなに遠くないところで撮影されました。そして、ロバートの「HUSTLE」での最後の撮影日が2006年11月29日、ナタリーの25回目の命日だったのです。

ナタリーは私の記憶の中でとても特別な存在を占めています。光り輝き、美しく、刺激的、魅惑的、彼女はこれら全部を持っていました。しかし、私にとって彼女はこれ以上で、いとしく、優しい、その友情がとても重要であった若い女性でした—そして今も—私にとって、とても大切な意味のある女性なのです。

もう一度言います、ありがとうナタリー。

(注1)

MCA : Music corporation of America 当時はタレントエージェンシーのちにユニバーサルからスタジオを買い取り、巨大化していく

(注2)

Revue Production:

MCA によって1945年につくられたラジオライブショー制作会社
MCA がユニバーサルからスタジオ用地を買い取ってからは
Revue studio と呼ばれ、1962 ユニバーサルテレビとなる。

(注3)

Goldwater は 1964年の大統領候補 共和党

(注4)

FDR フランクリン・ルーズベルト大統領